

書評 “ゴッフマン『スティグマの社会学』を読む”

——スティグマのある人と常人の相互による受け入れ——

杉野ふき

0. はじめに

この書評の著書である『スティグマの社会学』は、ゴッフマンによって1963年に書かれた『Stigma』の全訳である。そして、このスティグマという言葉は現在に至るまで医学、社会学、心理学などのさまざまな分野で用いられているが、その基礎となった本書を読むことによって、スティグマの意味を考えていきたいと思う。では、本書の要約を書いていく。

1. 要約

I部では、スティグマと社会的アイデンティティについて書かれてある。ここで、筆者によるスティグマの定義づけがなされている。スティグマとは、最初に用いたのはギリシャ人であったが、それは肉体上の徴を言い表す言葉で、その徴をつけているものの徳性上の状態のどこか異常な所、悪い所のある事を人々に告知するために考案されたものである。今日では、最初のギリシャ語の字義上の意味に似た意味で用いられているが、不面目自体を言い表すのに使われている言葉である。そして、社会が人々をカテゴリーに区分する手段と、その成員の属性を画定するのであるが、未知の人が面前にいる間、その人に適合だと思われるカテゴリー所属の他の人と異なり、望ましくない種類の属性をもっていると立証されると、その種の属性がスティグマと言われ、人の信頼を失わせるような属性とされた。このスティグマには大きく3つの種類があり、第1に肉体上の奇形、第2に意志薄弱、不正直、暴力的等という個人の性格上の欠点、第3に人種、民俗、宗教などの集団的なものがそれである。ここで、スティグマに対して常人という言葉が出てくる。常人とは、我々の期待から負の方向に逸脱していない者のことを指している。そしてスティグマのある者も常人も、アイデンティティに関しては「自分は正常の人間である」という考えを持つ傾向がある。しかし上記で述べた属性より、スティグマのある人は自分の欠点を矯正したり、個人的努力をし、自分の生存条件を改善することを試みるという反応を示すのである。そして、特定のスティグマのカテゴリーの成員たちは、成員のすべてが同一のカテゴリーに属する人から成り立つ小社会集団を形成する。しかし、常人とは異なり、スティグマのある人は1つの出来事が彼らの精神的遍歴に、実際の転回点となる直接的客観理由として、現在他の人によって取られている立場を説明する手段としての二重の意味を持つ。これは、特定のスティグマのある人たちには、ほぼ同一の意味をなすことになるのである。

II部では、情報操作と個人的アイデンティティについて書かれてある。さまざま情報の中でもスティグマを研究する際に重要な意味を持つのは社会的情報である。社会的情報は、その所有者の威信、名誉、社会的に望ましい階層的位階との関係を立証する。この種の信号は、スティグマのシンボルに注意を引き付けるように強く働き、その個人に対して我々が低い評価を与えることになるような信号に対比される。ここでパッシングについて書かれてあるが、筆者によるパッシングとは、まだ暴露されていないが、暴露されれば信頼を失うことになる自己についての情報の操作のこととされている。このパッシングの問題は、

伝統的に特定のスティグマの可視性という問題を提出してきた。スティグマが明らかになるのは、普通視覚を通してであるが、スティグマの可視性の強さによって視覚の有無を問わずに現れるのである。それと関係して、スティグマのある人のスティグマを隠そう、矯正しようという努力は、個人的アイデンティティの一部として定着している。そのことは、個人的アイデンティティの構成に社会的アイデンティティの側面を利用することから明らかである。次に常にパッシングしている者の心理状態の問題を掲げている。それには3つあって、第1にパスしながら生活を送っていることで、崩壊のときがいつくるか分からないという点での心理的不安、第2にパスしている者が違った集団に引き裂かれると感ずるといこと、第3に普通の社会的場面の諸相に、パスする者は敏感でなくてはならないということである。これらの問題も、スティグマのある人がパッシングという手段を考えず自己の現在を肯定し、自尊心を持つならば、自己の欠点を隠す必要がないと考えるに至るだろう。このようにしてスティグマのあることを率直に認めることができるが、認めることができる人でもそれが他人の目に大きく映らないように偽装工作をするのである。

Ⅲ部では集団帰属と自我アイデンティティについて書かれてある。まず3つのアイデンティティのスティグマに関する考察可能な事柄についてであるが、社会的アイデンティティは、スティグマの成立過程を考察可能とし、個人的アイデンティティは、スティグマの処理に際しての情報操作の役割の内容を考察可能とし、自我アイデンティティは、個人がスティグマ、又はその処理について感ずることを考察可能としている。これらのアイデンティティに関して、スティグマのある人がその基準を習得し、基準どおりに生活できないにもかかわらず、基準を自分自身に当てはめたとき両価的感情が生じる。スティグマのある人が職業に関して呈示される準則は、いくつかの標準的な事柄にわたり、例えば精神疾患の既往歴を持つものが、単なる知り合いにはそのことを隠し、家族、雇用主には告白するといった、告白、隠すことの望ましさが示唆されている。公然に指示されている行動準則は、障害者が弱々しく、不健康そうに振る舞うというようなことだが、これらの準則を守れない者は、心得違いをしている人間、誤った指導を受けた人間であり、準則を守る者は真摯な尊敬すべき人間であり、この2つの精神的価値は両方相俟っている正当性を構成するといわれる。もし、スティグマのある人が自分の特異性にこだわりを持たずにいるならば、彼らの行動が常人たちにも影響を及ぼし、社会的交渉場面で容易にこだわりを感じないで受け入れることができる。しかし、スティグマのある人はこの受け入れに限界があることを知っていなくてはならないし、限界以上の受け入れを要求してはならない。だから、スティグマのある人が一方で晴れやかに自意識を伴わずに自己自身基本的に常人と同じ人間として受け入れ、他方常人がスティグマのある人を常人同様に受け入れていると言にくい状況から自発的に身を引くことを条件にすることがよい適応とされ、適応の良否を示す線は、包括社会の視点を取る者たちによって引かれるのである。再度、自我アイデンティティを、内集団は政治的表現で、外集団は精神医学的表現で与えるとしている。スティグマのある人は自分自身自我アイデンティティをどのように考えるべきかをめぐっての込み入った論証の場に立っていることに気づく。これについての解決法は、遁走の道のどれかひとつを指示する意見を書くこと、話すことだが、ただ読んだり、聞いたりするだけの人々の多くには拒絶されるという結果を生み出してしまうのである。

Ⅳ部には自己とその他者について書かれてある。常人とスティグマのある人の双方が接

触する社交場面で、スティグマのある人が、タブーとされるスティグマを表示する言葉を使用するという冗談は、スティグマのある人がほかの誰とも同じ人間であり、同類の人間に関する他者の見解を先に詰め込まれていること、他者の居合わす所ではスティグマの事を口にする特別な免許を持っている点で、常人と異なっていることが証明される。しかしこれは特異性を理解してもらいたいがために平均的な人々という常人に対して行ったことである。だが結果的にはアイデンティティに関する規準より、順応と逸脱を生み出す結果となるのである。スティグマとは、スティグマのある人と常人の2つのグループに区別できるような具体的な一組の人間を意味するものではなく、広く行われている2つの役割による社会過程を意味しているということ、あらゆる人が双方の役割をとって、少なくとも人生のいずれかの脈絡において、局面においてこの過程に参加しているという事である。

V部ではさまざまな逸脱行為と逸脱性について書かれてある。逸脱行為の生起する舞台となる諸集団が大きさの点で異なっていることにより、すべての逸脱者には類似点よりむしろ相違点が多いといえることができる。逸脱者といってもさまざまな種類に分けることができる。まず組織された集団内で集団の仕組み方が量義的ではあるが、密接である点が別の逸脱者（＝集団内で社会的場面にいるが集団の成員にならないという集団内孤立者）と違う、内集団逸脱者がある。この内集団逸脱者は成員が指示する規範生活にほぼ従っているものである。他には、社会秩序を何らかの仕方で集団的に否定する行為を行っていると考えられる、集団的逸脱者がある。この人々は、社会の動機づけの枠組みに収まらなかった者の代表とされる。しかし、どの型の逸脱者も完全な個人的アイデンティティの同定資料が行き渡っているような範囲内に限定されているのである。多様なスティグマ所有者たちは、分析のためにスティグマのある人を一括することを保証するほど十分に、生活上共通の状況におかれていること、そこには伝統的な社会問題の諸分野すべてに共通しているものの抽出が試みられ、この共通点は人間性に関する仮定に基づいて組織することができる。しかし、それぞれの分野は、いくつかの視角を適用すべき1つの領域に過ぎず、その領域の実質だけ限定しようとする研究者によって開発されず、展開もされないのである。

2. 批評

以上本書の要約をしてきたが、ゴッフマンの『スティグマの社会学』以外の著書について、ゴッフマンはスティグマという言葉をもどのように扱っているのだろうか。著書の中の2作からしか考えなかったが、このことと、『スティグマの社会学』で述べられていた、“スティグマのある人は当然のことであるが常人も両者が互いに受け入れられるように努力している”ということも踏まえて述べていこうと思う。

1作は『アサイラム』からの、スティグマの扱いについてである。ここではサブタイトルにも使われているが、施設⁽¹⁾被収容者の施設内での生活が書かれている。ここで、施設の患者が外部の人々と交渉する場面においてスティグマが使われている。

少数の患者が病院システムを利用するときを使う興味深い手口の一つは、外部の人びととの社交的な交際と関連するものである。外部の人びととの交渉への関心は、患者たちの病院内でのカースト的立場、ならびに狂気というスティグマの烙印と結び付

いた神話に関連していると思われた。…(中略)…したがって、運動場や娯楽施設で
く正体を知られずに済む> passing ことがあったりすると、狂気と正気の区別はほん
とうはつけ難く、また正気の者もほんとうはそれほど気が利いているわけではないと
いう確証の重要な拠り所として利用されたのも理解できることなのだ。

[Goffman 1961a: 訳 226]

ここでは施設被收容者、言うならばスティグマのある者は、外部の人びととの交渉によっ
て、自分がスティグマを持っているということを忘れることができるというのである。外
部の人と同じ意味を持つであろう常人との接触によって、スティグマのレッテルを貼られ
るというのが『スティグマの社会学』で述べられていたが、スティグマのある人にとっ
ては、まるで逆の役割をもたらしめているように思えるのである。さらにもう一カ所スティ
グマについて扱った文が書かれてある。

患者だけが、自分の難儀を単に治療を受けついで忘れ去られる病気の一つにすぎな
い、と見るのを拒否する唯一の人間ではないように思われる。一度精神病院に入院し
ていたことがあると記録されれば、形式的には雇用の制約という点でもまた非形式的
には日常のつきあいという点でも、世間一般は彼を別扱いすべきだと考える。世間は
彼に烙^{スティグマ}印を押すのだ。

[Goffman 1961a: 訳 357]

ここでは特に精神障害者の病院收容について書かれてあるが、この被收容者は、スティ
グマのある人とされ、市民社会からの疎外感を感じる。そして、現在精神障害者の人と
どまらず、以前精神障害者であった人も、世間は彼らをスティグマのある人と見なしてい
る。このことは『スティグマの社会学』にも同じように述べられている。しかし、後の文
で一部の人々の間では精神病院收容をスティグマとすることはなくなる傾向にあるとい
うことが付け加えられている。このことは先に述べた常人がスティグマのある人を受け入れ
ようとする努力の結果の1つと言えられる。

2作目は『出会い』からの、スティグマについての扱いである。ここでは出会い⁽⁴⁾にお
ける人々の行為について書かれてある。その中でもスティグマに触れているのは次のと
ころである。

「漏れ言葉」⁽³⁾や「サイン状況」⁽⁴⁾が起きやすい文脈が作り出されることがあるの
が、目や手足に障害がある人びとの特殊な運命だということに注目することができる
だろう。障害がある人を「注目するな」という機転をきかせた標準的なルールに固守
する出会いには、成り行きまかせの安易さが伴いやすい。…(中略)…人種的または
民族的種類の社会的スティグマを持った人びともまた、そして、元精神病患者、前科
者、ホモセクシャルのような道徳的スティグマを持った人びともまた、この苦境を分
かち持っている。このような個人は自分が身を置くほとんどあらゆる出会いに対して
逆効果になってしまう不幸な特性を処理する方法を学ばなければならない。

[Goffman 1961b: 訳 40]

これは、出会いの場面で相互行為を行うとき、片方がスティグマのある人なら、事件⁽⁴⁾が
起きるということではないだろうか。上記のスティグマは、『スティグマの社会学』で述
べられていたスティグマの3つの種類に当てはまるものである。スティグマのあるすべ
ての人々において、出会いの中で事件がおこると予測されるときにはスティグマのある人自
らが、出会いを適切な形に整えようと努力すべきであるということを示している。ここで

は、常人についての反応や行為は詳しく述べられていないが、スティグマのある人を受け入れるために標準的なルールを使うということが逆にスティグマのある人にとっては好ましくない行為となることがあるのを示している。したがって、常人にとってもスティグマのある人にとっても受け入れる・受け入れられるという行為を行うことは、幸にも不幸にもなるということが言えるだろう。

次に、改めてスティグマという言葉について考えていこうと思う。スティグマの定義としてゴッフマンは『スティグマの社会学』において「非常に評判を悪くする特質を持つもの」としている。スピッカーは「スティグマは尊厳の喪失、不適切な処遇、抑制、落屑、市民権の否定、恥、きまりわるさ、不利益、失敗と不適応に対する非難、給付申請のさいのためらい、レッテル貼り、そして劣等感と同一視されるが、集団にせよ個人にせよ実際に他の人々に関わる時において初めて意味を持つ」「実態そのままの概念ではなく相対的な人間関係においてあらわれる」[Spicker 1984: 訳 不明]と、定義づけている。クロセティは「医学においてスティグマという言葉は、確認や判断の助けとなる特質・特性と意味するものとして使われているが、社会科学においてはそれはいつも暗に否定的意味を含むものとして使われている」[クロセティ 不明: 訳 不明]としている。さらに、スティグマ化については、ゴッフマンはスティグマの3つの種類に当てはまる人が、スティグマ化されやすいと述べ、クロセティはある人が社会と交わろうとするときにある異質の集団特性をもっているという理由で拒絶されたとき、いつでもそのひとはスティグマ化されたことになる」と述べている。そして、スティグマ化されるとどうということが起こるのかについては、スピッカーは身分の低下、社会的アイデンティティの破壊、人間性の否定が起こると述べ、クロセティは支配的集団が、道徳、知能その他の優性を主張することで、スティグマ化された弱い集団を搾取したり、抑制したりすることが起きると述べている。これらの主張からは少しずれているが、大谷は日本における精神病やハンセン病患者が過去に経験した差別に関連して、これからはエイズや難病と言われる患者に対して、国民が意識的、無意識的にスティグマ化し、昔と同じように差別するという状態になることを心配していると述べている。比べてみると、どの主張も少しずつ異なっているが、共通していると思われる点は定義を「非常に評判を悪くする特質を持つもの」としたゴッフマンの主張に至るだろう。

これらのことを踏まえた上で、わたし自身スティグマについて定義すると以下のようにまとめることができる。スティグマのある人とは、一般的に常人の視点から見て悪いと考えられる経歴（過去においても、現在においても）を持つ人である。ここには、生まれつきスティグマを持っている人は含まない。なぜならば、『スティグマの社会学』の本文の前に書かれた“ローンリハーツ様あての手紙”を書いた人のように、自分は何も悪いことをしていないにもかかわらず、スティグマ化されるということは非常に不満なことだと思われるからである。スティグマは自分自身で反省すべき項目を持った人が持つにふさわしいと考える。ということは、昨日まで常人であった人が今日からスティグマを持つ人になることができるといえるのである。

注

- (1) ここでいう施設とは、包括的、又は全制的性格が、外部との社会的交流に対する障壁、物理的施設自体に組み込まれている離脱への障碍物によって象徴されている全制的施設を指す。
- (2) ゴッフマンの出会いとは、焦点の定まった集まり、状況に関わりのある活動システムを指し、具体的には、パーティー、二人でするダンスのようなもののことである。さらに、Goffman, E. 1963 *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*. 丸木・本名訳『集まりの構造』原注 第六章 (12) 282. も参照。
- (3) 口を滑らせたことが意図的でないと感じられたとしても、滑らせた人は何らかの責任を取らなければならない場面で発せられた言葉。
- (4) 以前は容易に無視されていたようなアイデンティティを認めることを、あまりにも適切に表現してしまうような環境的出来事の配置が、意図せずまた不本意に出現してしまうような状態のこと。
- (5) 出会いの中で、意図されたもの、そうでないもののどちらにしろ出来事が起こり、それが突然緊張の度合いを高めるもののこと。

参考文献

- クロセティ, G. 著 加藤正明 訳 1978『偏見・スティグマ・精神病』 星和書店 .
- Goffman, Erving 1961 a *Asylums : Essays on the Social Situations of Mental Patients and Other Inmates.* =1984 石黒毅 訳 『アサイラム——施設被収容者の日常生活』 誠信書房 .
- Goffman, Erving 1961 b *Encounters : Two Studies in the Sociology of Interaction.* =1985 佐藤毅・折橋徹彦 訳『出会い——相互行為の社会学』 誠信書房 .
- Goffman, Erving 1963 *Behavior in Public Places : Notes on the Social Organization of Gatherings.* =1980 丸木恵祐・本名信行 訳『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』 誠信書房 .
- 大谷藤朗 1993 勁草—医療・福祉シリーズ5『現代のスティグマ』 勁草書房 : 2-16.
- Spicer, Paul 1984 *Stigma and Social Welfare.* =1987 西尾祐吾 訳 『スティグマと社会福祉』 誠信書房 .

参考資料

Social Science Citation Index

Social Science Citation Index (略してSSCI) の利用方法について

徳島大学附属図書館の情報サービスカウンターにおいて、情報検索システムを使って調べる。そのためには、あらかじめ情報検索システム利用書の項目に、自分に必要なキーワード、検索期間、原文の使用言語を記入し、担当の人に渡せば情報検索システムを使ってパソコンに必要な言語を入力すると、項目にしたがって情報をパソコンの画面上に取り出すことができる。必要ならばすべての項目につ

いてプリントアウトをすることも可能である。しかし、検索中も、プリントアウトをしている間も分単位で使用料が必要となる。さらに、プリントアウトには(私の場合は300件であったが)時間がかかるので時間に余裕のあるときに利用するのが望ましいと思う。

Social Science Citation Index

キーワード : Erving Goffman STIGMA

検索期間 : 1990~1997年

原文献の使用言語 : 英語 日本語

該当件数 : 332件

	経済学	教育学	社会学	医学	心理学	その他
アメリカ	14	6	121	116	76	69
オーストラリア	0	0	4	5	1	2
ブラジル	0	0	1	3	0	1
カナダ	2	1	18	6	7	11
イギリス	4	0	14	13	5	6
ドイツ	0	0	1	2	0	0
アイルランド	0	0	1	0	0	0
インド	0	0	1	0	0	0
日本	1	0	0	0	0	0
ニュージーランド	0	1	0	5	0	0
ノルウェー	0	0	0	2	0	0
スコットランド	0	0	3	1	0	2
スイス	0	0	0	1	0	0
ウガンダ	0	0	1	0	1	0
イスラエル	1	0	1	9	0	0
計	22	8	166	163	90	91

※該当件数は332件 あったが、国名わからないものが14件あったため、318件で表にした

調査の感想・反省点

まず、検索項目の選択が上のような表を作ることとなったが、言語を英語としたことによってどの分野もアメリカが該当数の多くなる結果となってしまった。もともとスティグマは社会学の分野での著書であったので、社会学の分野に該当件数が多くなることは予測されたが、それよりも予想以上に医学分野の件数が多かったことが意外な結果となった。

そして、最も重要な反省点は検索期間を1990~1997年という最近のデータを取り寄せたことであった。もっと早く『スティグマの社会学』を読んでいれば、この著書が

書かれた1963年以降の10年間のデータを取り寄せて調査すると、ゴッフマンが影響を及ぼした分野について知ることができただろうと思う。SSCIのように詳細な情報が得られるものを利用しようとする場合は、調査対象となる事柄を前もって学習し、検索に臨むことが重要であることを一番の反省点として、今後に生かしていきたいと思う。